茅野市八ヶ岳総合博物館紀要10:1-12(2002)

書簡に見る志都児参加の歌会について

小　堀　幸　恵*

はじめに

八ヶ嶽岳麓文芸館は平成十二年十月、茅野市八ヶ岳総合博物館に設置され満一周年を迎えた。この一周年を記念し、当文芸館では八ヶ岳岳麓で生まれ、活躍した人物にスポットをあて、企画展を開催するということで、北山の湯川に生きた農民歌人、篠原志都児について、その生涯と交友と題し、企画展を行った。それに際しては篠原志都児の孫にあたる篠原圓平氏に多大なる協力をいただき、多くの歌人達との交友を物語る書簡や写真、その他多くの資料提供をいただいたことで、非常に充実した企画展を行うことができた。私も企画展にあたり、その助けとなればと思い、資料や書籍などを調べる機会を得たが、今回はその中から歌会の様子について、主に書簡資料からその流れと様子について、自分なりの考察を加えながら追っていきたい。

1．明治三十六年

この年に書簡で見ることのできる、歌会に関する記述は一回。同年五月十一日付の葉書にある。差出人は岩本木外（木外）久保田俊彦（赤彦）からであり、宛所も両角国五郎（竹舟郎）両角福松（福）篠原円太（志都児）となっている。その内容は次のようなことが書かれている。

拜呈來らん十六日午後三時より永明村矢ヶ崎こくやに於て同人數輩相會し短歌相會催す可く候間目下御多忙中とわ存し候へ共御差繰り御來席被下度猶落合平野等より來會者も下有之筈に付き添いて申上候也
もし御不都合ならば御手數乍ら御報被下度候也

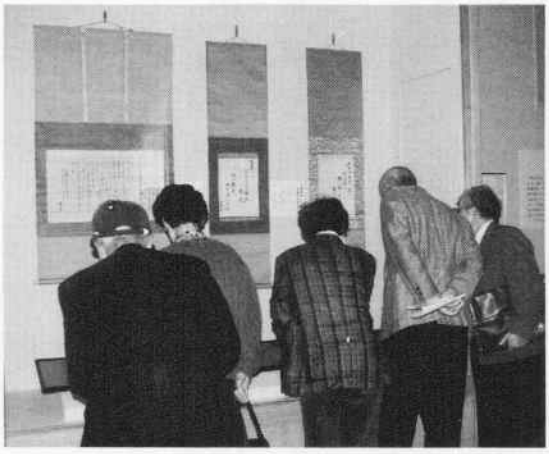
この時期志都児は『比牟呂』第二号に“千洲”の雅号をもつて俳句三句、短歌一首を初めて発表し、また『心の華』にも二月号から十月号にわたり十八首が掲載されており、歌人としての志都児が確立しつつあると考えられる。また宛所を見ると、志都児個人宛てではなく北山歌人宛てとなっている。このことにより志都児が北山歌人とし認知されていたこともわかる。尚この歌会の内容については書簡を追った上では不明であり、出席についても書簡で述べられた資料は見当たらない。

＊八ヶ岳総合博物館職員

2．明治三十七年

この年に書簡で見ることのできる、歌会に関する記述は一回。同年十一月二十六日に、志都児の歌の師である伊藤左千夫を迎え、布半（諏訪）で行われた歌会についてである。この年二月九日、志都児は日露戦役に、近衛師団補助輜重輸卒として満州に出兵している。

このとき左千夫や赤彦から征露の歌や九連城の戦についての歌が送られている。しかし志都児はわずか四ヶ月で胃と頭の病により六月八日、安東兵站病院に収容され、七月には広島の予備病院に転院し、八月には東京麹町の陸軍予備病院に収容されている。このとき、同病院に左千夫が見舞いに訪れており、その感激を両親へしたためた封書に見ることができる。その後脚気との病名のもと召集解除となってしまう。しかし出征時、盛大に送り出された志都児はなかなか帰郷しがたく、左千夫をたより、十六日間左千夫宅に滞在した後、故郷湯川へ帰郷している。



企画展
「歌人篠原志都児―その生涯と交友―」
初日の様子。興味深く見学する来館者。

またこの年、歌人としても比牟呂八号より、初めて“志都児”の雅号を用いている。

志都児にとってこの年は出征という大事があり、またそれによる病など、人生においても苦しい時代であったと思われるが、出征時や出征中などには、赤彦や左千夫などから書簡が届き、病を得て病院へ収容され、帰郷した後も病や近況を心配する書簡が幾度となく届いている。おそらくこれらの書簡が、志都児の苦境を大きく支えていたのではないかと考えられる。

歌会に関する書簡は、まず同年十月二十五日付のもので、赤彦から森山藤一（汀川）に宛てた葉書が挙げられる。これは直接には志都児と関係はしないものの、次のようなことが記述されている。

> **御手紙拜見仕り候小生近作一向に無之御恥かしく存じ候伊藤左千夫氏此の内に來遊のよしついてわ盛につばな會員の會員仕り度右につき一人一圓づゝ會費として御差出し相願度右わ先生の旅費の幾分と會合の會費全體お支辨せんとするものに候右御承諾の上小生迄御届け被下度候　十月廿五日**

これを見ると、つばな短歌会が主催で左千夫を迎え、歌会を行うので会員方から一人一

円を集める。この中から左千夫の旅費と歌会の諸経費を捻出したいとの連絡事項が記されている。

その後、同年十一月十三日付で赤彦は志都児宛に、次のような封書を出している。

左千夫君來遊の日が確定せずきまれば云つてやるから車ででも御出かけ被下度候

これは十月二十五日付の葉書にあり、左千夫を迎えて行われる歌会準備の進行状況を伝える内容と、この歌会への誘いである。

また十一月二十一日付で左千夫が志都児宛に、次のような葉書を出している。

少〃都合わるく旅行あきらめたかどうしてもあきらめられない二十三日早朝出立甲州へ一泊して二十五日頃御地へゆく萬ハ逢つてのこと草〃
十一月二十一日

これは今回の歌会のための左千夫の旅程を、志都児に知らせた書簡だと思われる。このような遣り取りを経て行われた歌会の日程は次のようなものであった。

二十六日、布半にて左千夫をむかえ、つばな会主催の歌会が行われている。この時の志都児の作歌には次のような歌がある。

ぬは玉の夜刈もおえてやすにいねしその夜を雨降ると呼ぶ
人皆のうましと食する串柿を歯が痛むのに吾は食しえぬ

翌二十七日、赤彦と志都児、竹舟郎、柳之戸などの北山歌人が主となり親湯へのぼり宿泊している。この時左千夫は平福百穂に次のような葉書を出している。

信州蓼科のふもと親湯といふ處に候此家の兩端に二軒の客室あり湯ぬるく湧くこと瀧の如しあたり山々にハ雪澤有之候
蓼科のふもとのみ湯にのぼりくるみちの長手に雪とこしけり
十一月二十八日

このような記述から左千夫は親湯で温泉を楽しみながら、歌を作っていた様子が伺える。その後二十九日、志都児は左千夫を自宅に招き、左千夫はそこで三泊した後帰京している。このように、左千夫を迎えての歌会はつつがなく行われ、後日志都児は左千夫から十二月四日付で、帰京を知らせる次のような葉書を受け取っている。

拜啓此度ハ千萬御厄介に相成御禮申上くる詞もなく候二日の夜ハ甲府に一宿致し三日夜漸く歸宅致候宅の方にも幸何事無之候間御安心被下度兩親様へよろし御申上被下度願上候敬具　十二月四日

またこれも志都児とは直接関係していないが、赤彦が武居正義に宛てた封書の中に

先日東京の根岸派和歌の先生伊藤左千夫氏來諏盛に和歌會お開きしました

と歌会の報告をする記述が見られる。

3．明治三十八年

この年に書簡で見ることのできる、歌会に関する記述は二回。一回目は九月五日に行われたもので、長塚節を迎えての地蔵寺での歌会。二回目がその二日後に行われた、同氏を交えて布半で行われた歌会である。

この年の志都児は作歌に熱中し、多くの歌を残している。各短歌雑誌への発表歌年次別数を見ても三十八年を境に多くの歌を発表していることがわかるが、その中でも三十八年が最も多くの歌を発表している。また精力的にさまざまなところへ足を運び、十一月に横岳を登山し、十二月には甲府へ出かけその足で左千夫庵を訪れている。

一回目の歌会については、九月五日、長塚節を迎えての歌会である。これについては九月三日付の手紙で、赤彦から志都児に宛てたものに次のような葉書である。

拜啓其後御無申候譯無之候
長塚節氏明四日布半につき五日に歌會お開き六日に霧ヶ峯登山せんと存じ候間兎ニ角五日に御來會被下度候也　九月三日

内容は長塚節を迎え五日の日に歌会を開くので、是非来なさいと志都児を誘っている。歌会の様子を馬酔木二巻五号にその様子が掲載されている。九月五日に地蔵寺において行われた歌会の出席は赤彦、汀川、胡桃沢勘内、志都児であり、長塚節を入れ五名である。この時の歌会のお題は秋の田、蜻蛉、残暑、朝草刈である。
この時の志都児の作歌には次のような歌がある。

麻干せる庭をたひろみ左右舞の早けき大山蜻蛉
吾まなこ病みしこの夏思ほへて名の哀れなる目にくらとんぼ

翌九月六日、赤彦の案内で長塚節、胡桃沢勘内の三人は霧ヶ峰へ登山している。

二回目の歌会は九月七日、布半において行われたものである。この歌会は長塚節が降雨のため、宿の布半で足止めとなってしまい、そこで行われた歌会である。出席者も汀川を除く一回目の歌会の出席者と同じである。この時の歌会のお題は秋の山、霧、灯、秋菓物である。

この時の志都児の作歌は次のようなものであった。

魚あさり川ぞひ行けば石通草いまだゑまなくこゝだ垂れたり
萩山に刈居れば茜さし日は透りつゝ霧はれずけり

歌会後日の志都児宛て書簡の中には、歌会について触れたものはないが、志都児自身が竹舟郎に宛てた書簡に次のようなものがある。

七日に早朝出立と言ひ居りしも長塚氏も朝よりの降雨出立も出来ず今日一日は色々雑話に日をくらし候、夜は長塚氏と久保田君と滑稽的話をいたされ腹をより申候胡桃沢君と予との如きは生まれて口にない大々的笑をいたし候、今でも其の当時の話を思へば一人で吹き出し申候

またこの時のことを赤彦が後年『アララギ』第十二巻二号に掲載している。これらの内容からこの歌会が出席者は少なかったものの、後年まで心象に残る歌会であったことが推察できる。

4．明治四十一年

この年に書簡で見ることのできる、歌会に関する記述は五回である。一回目は一月七日、北山の朴葉宅で行われた新年の歌会。二回目は一月二十五日、二十六日、布半で左千夫を迎えて行われた歌会。三回目は一月二十九日、左千夫と共に親湯に登り行われた歌会。四回目は五月十日、浅間千代の湯で左千夫を迎えて行われた麻葉会主催の歌会。五回目は十月十日、富士見油屋で左千夫、千樫を迎えて行われた歌会である。

一回目、一月七日に北山の朴葉宅で行われた歌会にて、志都児は次のような歌を作っている。

大年の神を迎ふる秋津島大和の国は雲晴れにけり
百八の鐘のひゞきに天地の眠りは明けて年立ちにけり

ここに挙げた歌はほんの一部であるが、この歌会に関する書簡については、一月一五日

付で志都児が左千夫より受け取った葉書に次のようなものがある。

拜復歌會のはかきも拜見朴葉繪が出來ると見え候（中略）何しろ今月中ニハ矻度ゆくから逢つてくはしく話し可申

どうやら志都児が、件の歌会時の葉書を左千夫に送った返信のようである。また、後日左千夫が会いに行くとの内容もあり、二回目の歌会への呼び水ともなっている。

二回目は一月二十五日、二十六日に布半において左千夫を迎えての歌会が行われている。この歌会に関する書簡については、一月二十三日付で志都児が赤彦より受け取た葉書に次のようなものがある。

二十二日夜
只今左翁より來書　明日來諏との事　廿五日の歌會大に賑ぐべく喜び入り候早く御出掛下され度候

とあり、赤彦は二十二日の書簡より左千夫の諏訪到着の日時を聞き、その事を志都児に葉書で伝えている。当日の歌会は非常に賑わい、出席者は左千夫、赤彦、竹舟郎、梨村、唖水、汀川、志都児、山水、胡桃沢勘内の九人で行われている。翌日二十六日は梨村、竹舟郎が去り、河柳、黙坊が来て行われている。布半での歌会はここで終わり、二十七日より左千夫は志都児、黙坊とともに北山を訪れ志都児宅に一泊している。

三回目の歌会については一月二十九日、新潟にて左千夫、志都児、黙坊、柳之戸、竹舟郎の五人によって行われている。ここで志都児は次のような歌を作っている。

蓼科の出湯の谷間未遠く雪の御岳今日さやに見る
こゝにして見放る空に雲もなく秀つ根山天にきほへり

なお、この歌は現在親湯入り口に歌碑として残されている。

左千夫の親湯入りは二十八日のようで、一月二十八日付の葉書を親湯から堀内卓へ出している。

啓二十四日上諏訪旅行二十五日諸同人歌會あり會者九人大ニ振へり胡桃澤子も來會望月少病にて來らす小生も松本行き止めて此新湯に來れり寒気猛烈閉口三十日歸京之つもり也

ここには二十五日の布半での歌会の様子と、親湯の気候、帰京の予定が書かれている。
歌会後日、志都児は左千夫から二月五日付で、次のような葉書を受け取っている。

拜啓小生三十一日雨ニ濡て夜中歸宅致候大ニ風を引き二日許臥床致候諸君へも返書も不出今日漸く手紙を書き申候天然痘も騒ぎ程ニハ無之候乍何時御厄介ニ相成御厚意奉深謝候まつハ不取敢御禮まで草〃　五月

これは帰京を知らせるとともに、厄介になったことへのお礼を述べる内容となっている。
四回目の歌会は五月十日、浅間千代の湯で行われた歌会である。この歌会は左千夫が越後への旅の途中、諏訪へ立ち寄り、浅間までの旅程を志都児を伴い、浅間で宿泊した千代の湯でおこなわれている。左千夫の旅程については五月十三日付で左千夫が長塚節に宛てた書簡で知ることができる。

十二日朝淺間温泉を立つて茲へ來た茲ハ柏崎の北方二里の在てある何の爲に茲へ來かと問ふ勿れ説明するハ永いから畧す久保田方へ一夜とまる篠原森山來る九日に下スワの温泉で一酌し篠原を携へて淺間へ深更ニ着例の人々の外湯木かきた湯木も物になりさうだ終に三夜滯留した

また浅間の歌会の出席者は、五月十日付で蕨真次郎に宛てた葉書の連盟を見ると、左千夫、望月光、円太、胡生とあることから少なくともこの四名は出席していたと考えられる。
この時志都児は次のような歌を残している。

葭剖の鳴きのさやけく野を見のはれゝゝし青葉とる頃
宵々に降り来る雨は桑葉はやもつむべく世は忙しも

歌会後日、志都児は左千夫から五月十七日付で次のような葉書を受け取っている。

果実ハ大に失敬した淺間の三日愉快であつた越後の四日ハ暫く濛氣に任せるいつれほとゝきすの一月号あたりへ小説として現はるへし越後ニ而ハ歌も作つた十六日敦賀へ宿る信州より越後の方雪が多い越後より越中ハ更に多い有名なる立山滿山の白雪若葉の上になき渡つて實に莊觀を極めてゐた十七日朝より大雨且つ風敦賀に居られないから京都へきたいつ見ても感じよきハ京都てある風も止んだのかないのか穏かある今夜ハ漸く落ちつきて寝られる不宣

これにより左千夫は浅間から越後へ、その後敦賀に泊まり京都へと旅を続けていることがわかる。

五回目の歌会は十月十日、富士見油屋において、左千夫、千樫を迎えて行われている。この歌会に先立ち、志都児は左千夫から九月十三日付で次のような葉書を受け取っている。

其後消息なく如何致候や近頃不順ニ寒く御地の候氣作物ニ害なく候や富士見高原ハどうしても見たいから十月ニなつた出かけようかと考へて居候

この時点ではまだ日程は決まってはいないものの、十月には富士見へ行きたいと考えていることを伝えている。また志都児は赤彦から九月二十二日付で次のような葉書を受け取っている。

盆忙シイダラウ
此間ノ子規忌ハ不二見會ヨリモ面白カツタ　眞面目ナ話デ持切ツタ　歌モ少シハ物ニナル者ガアル二三日中ニ送ル君ノヲモヒアラバ見セロ
何日ニ蠶ハヒキル　ヒキタラスグ遊ビニ來イ左翁ノ會諏ヲ機トシテ不二見デ比牟呂誌友會ヲ開カント思フ　誰モ彼モ一度ハ面談シタガヨカラウト思ツテ考付イタ　甲州ヘモ言ツテヤル　僕ハ今比較的ヒマダ　九月廿二日

ここで赤彦は左千夫の富士見訪問を機に、比牟呂誌主催で歌会を開きたいとの考えを志都児に伝えている。しかしこの時点でもまだ左千夫来訪の日程は決まっていないと見受けられる。その後志都児は再び左千夫から九月三十日付で次のような書簡を受け取っている。

拜啓秋氣心持よく相成候富士見高原之會ハ頗る仰山ニ相成候様ニ候小生も諸君に逢はるゝ樂みを今より想像致居候それにつき君に少〃無心願上候甚申兼候へともいつか君より所望ありし不折之画幅ハ蕨桐軒ニやる心組之處いつまて立ても茶室も出來不申聊か馬鹿〃〃しく相成候間あれを進呈可致候間表装代として十円許り御送金被下度頼入申候それにて小生は旅費を辨し候つもりニ候兒共多く持ち候小生にハ何分家族の手前もあり本年も水害なと有之候次第故牛乳の方の金を以て旅行するは甚だ心苦き事情有之候何卒此邊御推諒被下前項之件願上候書は其日に持参可致候それに就ハ君より小生へはかきにて「金を少し送りたればそれにて是非諏訪まで來てくれ云々」と書いて□し被下度くれゝゝも願上候萬ハ拜顔可申上甚だ汗背之義なれとも幾重にもご依頼申上候敬具

九月三十日夜　　左　生

志都兒様

これによると志都児は富士見の歌会をとても楽しみにしているが、左千夫は子沢山の上、今年は水害もあり、自費で旅をするのが厳しいとの事情を話している。そこで左千夫は志都児に、以前志都児が欲しがっていた中村不折の画を譲るので、その表装代として十円ばかりを用立ててほしいと頼み、そのお金を富士見までの旅費としたい旨を伝えている。

歌会三日前、志都児は赤彦に次のような葉書を貰っている。

父公如何氣に懸ル

今日左翁より來信　九日出發その夜不二見に泊ると申來れり

依て小生は九日午後二時半頃上スワ發の氣車で不二見に行くべし　君ハ八日小生宅一泊明日共に行くを最上とし　九日小生ノ汽車ト供に茅野カラ乗ルワ中等トス、ソレヨリ後ル〃ハ下等也

十月六日夜認ム

これにより歌会の日程が決まったことが伝えられている。この歌会で志都児が作った歌は次のような歌がある。

力士がかちのほこりに大手ふり辻めぐりすと土はらゝかす

また、歌会の様子は左千夫がそれぞれ寺田憲、長塚節、胡桃沢勘内に宛てた葉書より見ることができる。まず十月十日付で寺田憲に宛てた葉書に、

拜啓昨日當地へ参り候高原晩秋之草花只神さびて俗界を去る幾千里の感致候利根川の表紙一昨日不折訪問致候處不在ニて會見を得さりしも老母君へ懇ろに頼み置候間四五日の中に御送附可申上候右御報まて早〃　十月十日

とあり、十月十三日付で長塚節に宛てた葉書をみると、

又蓼科山にきた。茲に埋骨の地を得んとするの念起こる。やがて此希望を確定して而して供邊を散歩すれば愉快の情更に深い、秋草は全く影を絶ち紅葉が盛りである。富士見の歌會は會者十六人、非常に盛であつた。茲は猶滿地の秋草娟を競ふてる。三ケ月湖へはどうしようかと迷ふてる。十七日頃までには是非歸京せねばならない。君は必ず文章があるであらう。携て出京せよ。此行古泉君同行である。

と書かれており、同日付で胡桃沢勘内に宛てた葉書には、

啓富士見歌會ハ頗る盛なりしこれは望月君が話すなるへし十一日上スワに宿り十二日久保田篠原古泉と四人新湯ニ登る十三日ハ古泉と僕と殘る蓼科に埋骨の地を得たしの念頻に起る十坪の地と方丈の假庵を結び吾か餘生をこゝに籠りたい余り老人しみたと笑ふ勿れ青年時代に戀の奴となる事ある心事と同状なるへし不宣　十三日

とあることから左千夫は、十月九日に富士見油屋に到着し、十日歌会が行われれ、出席者は十六人と大変盛況であったことが分かる。翌日十一日は上諏訪に一泊し十二日に親湯に登っている。

歌会後日、十月十九日付で志都児は左千夫の帰宅を知らせる次のような書簡を受け取っている。

啓小生十七日歸宅致し候貴書も昨日拜見致候諸君を失望させ候事誠に残念ニ存候古泉君と彼日湯川橋上ニ別れ小泉ハ直ニ茅野に向つて馳せ去り小生ハ貴宅へ寄候處どなたも居らぬ故カバンと傘を障子の内へ入れ置き雪人許りたつね候處これ又留守にて本家の雪人君の御親父なる人と暫く話しそれより湯川へ引返し橋本にて晝食など致候橋本にても席もない有様と聞き一旦山中湖行ハ呆めたるも天氣よろしき故茲に俄に山中湖行を決心致し候再度貴家を訪問してカバン等を持出し（尤も若い女か居た其人の云はく近頃参りました故皆の往つてる家か判りませんから云々僕は君の○君にあらずやと思つた怒り給ふな）それから大急ぎで茅野へ出ると三分許りの差で失敗がつかりして茅野停車場の前へ宿つて了ひ候君の家へ上つて寝轉てゝも居ればよかつたと後悔しても間合はない（中略）山中湖へ行かれないならは今一夜君と話せばよかつた何でも氣揉するとまごつくものと存候乍何時君の厚意はしにじみと嘻しい君なとゝ小生の關係は歳月の關係てはない一生を通して猶後世に至るまでの關係に候目前の小利害心に囚はれて一年や半年の間に相敵視する様な無節操事ハ小生らは生まれかはつても嫌に候小生は一人東京に居つても信州に眞に同人が澤山あると思へは少しも淋しくは無之候

これは帰京の挨拶とともに、湯川で小泉千樫と別れた後の顛末が書かれている。また志都児や北山同人との友誼に触れ、北山同人との精神的な繋がりを非常に尊いものと感じていたことが伺える。これらの経緯を見ていくと富士見での歌会は非常に多くの出席者がおり、盛況であったと同時に左千夫自身が蓼科を終の棲家として考え始めるなど、心情的にも思うところの多い歌会であったと考えられる。

おわりに

今回取り上げた歌会は大規模なものが主であり、小規模なものや書簡に多くの記録がないものは割愛した。これらを通して見ていくと歌会の発端から経緯を経て、当日の様子から後日談までの営みがひとつの流れとして実感できるのではないかと思われる。また書簡を追うことで差出人の文面から直に臨場感が感じられるものである。

また今回は主に書簡から歌会の様子を探っていったが、ここへ『馬酔木』や『比牟呂』などの記述を加味することにより、さらに充実した考察も可能であるとも考えられる。このような課題も残したが、これで歌会の考察も終わることとする。

【参考・引用文献】

『寂寥』　1989年　篠原圓平編

『左千夫全集　第九巻』　1977年　伊藤左千夫著　岩波書店

『赤彦全集　第８巻』　1930年　久保田俊彦　岩波書店

『島木赤彦と篠原志都児』　1976年　馬詰嘉吉著　淵上祐史

『航跡』　1971年　篠原亮逸著

『歌人篠原志都児―その生涯と交友』　2001年　茅野市八ヶ岳総合博物館
八ヶ嶽岳麓文芸館

篠原志都児家所蔵書簡目録

氏名	年	明治35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	大正1 45	2	3	4	5	6	7
篠原志都児	封書			31			3	2										7月19日没
	ハガキ			1			2	1										
両角福	封書					1												
	ハガキ	不祥 2																
両角竹舟郎	封書			2	5	4	3	2										
	ハガキ				1			2										
柳沢黙坊	封書	不祥 4		3			7	1									3	2
	ハガキ																1	
蕨真一郎	封書													1				
	ハガキ						8	7	1	8	1	1						
胡桃沢勘内	封書												1	1				
	ハガキ				1	3	8	9	11	12	8	11						
堀内卓	封書						1		1	1	10月19日没							
	ハガキ						1	8	4									
望月光	封書	不明 2				1	1											
	ハガキ				1	5	3	12	8	2	2	10月19日没						
古泉千樫	封書												1	1				
	ハガキ																	
平福百穂	封書													1				
	ハガキ									3	1	2	2					